

原爆文学研究会報

第4号

原爆文学研究会 二〇〇二年 一〇月

「犯罪は、計画的にやった方が罪は重い……」

インド代表は言葉を失った。苦笑する他国の代表。一九九八年一月二五日、長崎ブリックホールで開かれた「第二回国連軍縮長崎会議 若者との意見交換会」の一コマである。

この会合の出席者は、米国・中国・インド・パキスタン・インドネシア各国の代表と大学生たち。学生たちは各国の主張をできるだけ予測し、それに疑問を投げかける準備をした。相手は国連軍縮会議の出席者である、それぞれが自国の正当性を強く訴えるだろうことは予測できた。核保有国は「…が核を持っているから自分たちも持つしかないのだ」と譲らないだろう。折しも五月にインドとパキスタンが相次いで地下核実験を強行したばかり、議論は白熱する。学生「この五月にパキスタンが核実験をしたことについてインドにも責任があると思いますが、いかがですか」

インド代表「現在インドは、中国やパキスタンといった敵国に囲まれています。したがって……」

中国代表「ちよっと待って下さい！中国はインドを敵国だとは思っていませんよ。今の発言は撤回してください！」

インド代表「……インドは一九七四年に初めて核実験を行って以来、今年になるまで一度も実験を行っていませんでした。インドは決して軽率な国ではありません。二〇年以上、国内で十分に議論した結

果、核開発をするしかないという結論にいたったのです」

当時長崎大学三年生だったFが論駁を加えた。

「ぼくは核開発を犯罪だと考えています。犯罪は、計画的にやった方が罪は重い。インド政府が二〇年以上十分議論をした上で核開発をしたのならば、インド政府の罪は、それだけ、重い」（中野 和典）

第四回 原爆文学研究会報告

二〇〇二年九月一日（日）長崎大学文教キャンパスにおいて「第四回 原爆文学研究会」を開催、長崎県内外から約二〇名が集いました。

石川氏の研究発表に続く質疑応答では、「現在から見れば陳腐に見える言葉も、川端康成たちは全く新しい言葉として受け取っていたのではないか」「結局「出来事」を囲い込んでしまう岡真理氏の論にも問題があるのではないか」等の発言がありました。



中原氏の研究発表については、「原爆詩とは何かというジャンル分けは問題の立て方によって変わるのではないか」「詩は小説に比べて虚構として受け取られにくいいため、作者が自らのこと語っているとどう伝わり方をしてしまうのではないか」等の発言がありました。

◇研究発表1

日本ペンクラブの「ヒュー マニテイ」をめぐるって

石川 巧 (九州大学)

一九四九年十一月。日本ペンクラブの川端康成会長、豊島與志雄幹事長、小松清幹事、水島治男書記長は、広島市の招待で原爆被災四年後の広島を訪問する。広島では、「原爆と文学」、「文学者と平和」の問題が議論され、日本ペンクラブ側から、翌年の例会を広島で開きたい旨の提案がなされた。

こうして日本ペンクラブは翌年の四月に代表一九名を広島に送り「広島人会」を開催し、被爆地ヒロシマおよびナガサキの声を世界に向けて発信し、世界平和に貢献する「宣言」を採択したわけだが、今回の発表では、まず「広島会」に参加した川端康成、青野季吉、阿部知二、芹沢光治良らが新聞・雑誌等のメディアに発表した印象記を読むことで、彼らがそこに見いだしたモチーフを探ることからはじめた。

同時期の新聞・雑誌記事を覆っている色調を検証してみると、そこにはいくつかの特長がみられる。ひとつは、ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』（一九四九年四月・法政大学出版局）をはじめとして、アメリカのジャーナリズムがいち早く原爆の問題をとりあげ、その惨劇を世界にアピールしているのに、日本では、ごくわずかな作品しか発表されていない現状に対する憂慮である。例えば、「ヒロシマの声に耳を傾け、その声を自分自身のものとしなければならぬ。ヒロシマは日本の中に在るのだ」という豊島與志雄の言葉（『ヒロシマの声』『世界』一九五〇年三月）からもわかるように、そこには、出来事を風化させず、出来

事の衝撃を国民ひとりひとりが共有するために、まずは作家が被爆地を自分の目で見て、その「声」を文学に結実させていかなければならないという決意がみなぎっている。高橋和巳が「戦後文学の思想」（『戦後日本思想体系一三 戦後文学の思想』『解説』一九六九年二月・筑摩書房）で用いた表現をかりれば、同時代の文学には、「世界の荒廃をみずからの荒廃としてひきうける」ために何が必要か、という命題が課せられていたのである。

また、当時のペンクラブは、文学者の戦争責任問題で揺れた同クラブをいかにして建て直し、諸外国の運動と足並みをそろえていくかという問題にも直面していた。ヒロシマ・ナガサキは、戦時下において不感症的なナショナリズムしか持ち得ないまま言論の自由を放棄していった文学者が、自らの存在意義を回復していくための格好の題材だったのである。ルポルタージュの文面には、それぞれの地を訪れた作家たちが、その傷跡のなまなましさに直面すればするほど、どこか澁刺とした生気を見せはじめ、いまこそわれわれの出番とばかりに張り切りはじめるようすが鮮明に刻まれている。

こうした点をふまえて、後半では、同時代の日本を覆っていた知識人の自己反省とヒューマニズムの言説の奇妙な結びつきについて考察した。また、当時、日本ペンクラブの会長を務め、最初の広島訪問を題材として「天授の子」という小説を残している川端康成に焦点をあて、それをサンプルとして、①原爆を直接に体験していない者がそれをいかに語るることができるか、②ひとりひとりの体験を普遍的な体験として記憶するために同時代の言論がどのような模索を試みたか、③「言葉では語る」ことのできない体験、「出来事」を、物語として語るといふ時代の要請（岡真理『思考のフロンティア 記憶／物語』二〇〇〇年二月・岩波書店）という見地から考えたとき、ペンクラブのヒューマニズムには何が欠けていたのか、などといった事柄について私見を述べた。

原爆詩の表現

中原 豊(長崎大学)

これまでに多くの原爆詩と呼ばれる詩が書かれてきているが、ここには種々の困難さを伴う問題が内包されている。書き手の側にとっては、山田かん氏の一連の発言にあるように、原爆を詩で表現することの難しさに直面する一方で、「原爆文学」「原爆詩」という一種のレッテルを貼られてしまうことへの反発がある。読み手の側の問題もそれと裏返しで、原爆というテーマの重さにたじろぎ、詩としての評価は留保したまま専ら歴史的・政治的価値ばかりに重きを置く傾向が強い。一部の例外を除いて、原爆詩を書くことも読むことも慣習的な同音異義語の反復に陥ってしまいがちである。

戦争詩(いわゆる戦争協力詩および反戦詩)についての議論が近年盛んになってきているが、それでも原爆詩が取り上げられることはない。だが、原爆詩は反戦詩の一種として捉えられるばかりでなく、その問題性においても多く戦争詩と通底しているのである。戦争協力詩に対しては戦時中に現れた特異な現象として正面からの評価を避けようとする向きがあるが、読み手側のそうした姿勢においても原爆詩に対するものと同質の部分がある。そして反戦詩に対しても政治的価値と文学的価値をめぐる議論が行われているが、その点においても原爆詩と同質なのである。

湾岸戦争を特集した雑誌に寄せられた反戦詩をめぐる北川透氏と

瀬尾育生氏の対談では、詩の主格としての「統覚としての個」が保たれているかどうかを基準として戦争詩を批判する北川氏に対して、瀬尾氏は戦争詩をむしろ軽挙妄動し付和雷同する存在としての人間の営為として捉えようとする。北川氏の立場に立つとすれば、原爆詩の中で批判を免れるものは多くないだろう。だが、瀬尾氏の立場に立つならば、原爆詩はまた違った様相を呈してくるように思われる。

例えば、「原爆詩人」としての世評が高い原口喜久也は、実際は敗戦後に長崎に復員して直接の被爆者ではなかったが、後に骨髄細胞腫に犯された自分を被爆後の長崎の現実に寄り添わせるように表現している。原爆資料陳列室での縊死という最期によって、原口は一種の自己劇化を完成させたともいえるだろう。その悲劇は単色のレッテルでは覆い尽くせない陰影を帯びている。自己劇化にすぎらざるを得なかった書き手の個としての在りよりの弱々しさを見据えらるとともに、「原爆詩人」の悲劇という物語を「消費」していた読み手の存在をも視野に入れることによって、原爆詩の真の問題性が明らかに becoming いくのではないだろうか。



彙報

第四回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇二年九月一日(日) 十四時より
- 会場 長崎大学文教キャンパス教育学部棟大会議室
- 内容 研究発表

日本ペンクラブの「ヒューマニティ」をめぐって

石川 巧

原爆詩の問題

中原 豊

運営協議会

機関誌「原爆文学研究」創刊号発行の報告等

- 懇親会 (十八時〜)

編集後記

「第四回 原爆文学研究会」を開催するまでのスケジュールは、幾分窮屈なものになりました。本会では年四回の研究会を開いていますので、通常ならば三ヶ月に一度の開催ということになります。しかし、第四回研究会にいたるまでには、六月二十九日(土)の第三回研究会から約二ヶ月間しかありませんでした。これは参加者のスケジュール等の理由によるものです。その間に機関誌『原爆文学研究』創刊号の発行もありました。ご多忙の折に会の準備に助力いただいた方々、特に研究発表をされた石川氏と中原氏には事務局として感謝の念で一杯です。

第四回の研究会の翌日、参加者数名とともに長崎の被爆遺構を見

に行きました。「原爆文学研究」創刊号裏表紙の「被爆くすのき二世」の親木が作り出した大きな木陰の下に立つと、つややかな葉が生き生きと光線を反射しているのが見えました。青い矢印に白色の案内、被爆当時の写真に説明を添えた金属板、ぼくは遺構について饒舌に語り続けました。

ふと、一本柱の鳥居近くで視線をあげると、通りに面した家屋の二階窓から一人の老人がじっとこちらをうかがっています。思わず身体をこわばらせたぼくは、そのままぎこちなく視線をそらしてしまいました。

「浮かれている場合じゃない」

炎天下、鳥居と自分の影を重ねながら、何故かぼくの頭中に差し込まれたのはこの言葉でした。そう、浮かれている場合じゃない。

原爆文学研究会は、発足一周年を迎えようとしています。(N)

※次回(第五回)の研究会は二〇〇二年十二月二十八日(土)に九州大学六本松キャンパスにて開催します。詳細は後日、案内状にて連絡いたします。

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp